

? アフリカ 1 タンザニア 洋装のタンザニア人

著者	池野 旬
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	88
雑誌名	「きもの」と「暮らし」：第三世界の日常着
ページ	166-173
発行年	1993
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017851

V
ア
フ
リ
カ



『カンガ・その利用法101』より

洋装のタンザニア人

池野 旬

おしゃれな女性たち

首都ダルエスサラーム市の繁華街で見かける「タンザニア人」女性は、概して洋装が多い。上はブラウス、下はスカートにハイヒールというスタイルだ。いずれもブラウス、スカートとはいっても、誰一人として同じでなく、さまざまな髪型、装飾品と併せて、相当おしゃれに気を使っていることが感じられる。街を歩いている子連れの女性が、スカートの代わりに下にキテンゲ、カンガと称される一枚布を巻いていることもある。オフィス街で働く女性も自宅ではキテンゲ、カンガに着替えてくつろぐようだ。

キテンゲとカンガがどう違うのかを何人かたずねたが、いまだによく理解できない。使い方はほぼ同様で、キテンゲのほうが生地が厚く、かつ上質というのが、共通意見だった。また、キテンゲ、カンガともに幾何学的に配置されたさまざまな模様があるが、カンガにはそれに加えてスローガンや格言がプリントされていることもある。



カンガをまとった老婦人と孫

キテンゲ、カンガには、腰にまとい、足首までくるロングスカートのような着方、胸元に巻いて膝下までくるようにしたワンピースのような着方、あるいは一枚を胸元に一枚を腰に巻いた着方と、いくつかの装い方があるようだ。また、同じ布が、頭を覆うスカーフ代わりにされたり、赤ん坊のおんぶ紐にも使われる。

こちらでアジア人と総称されているインド・パキスタン系の女性は、おなじみの民族衣装、サリーやシャルワール・カミーズ、あるいは頭巾と裾の長いワンピースを着用している。

黒い装束のアラブ系の女性にも、ときどきお目にかかる。とくに、かつてオマーンのスルタンの支配下にあったザンジバル島に多い。スワヒリ語にもお国柄があり、この装束をタンザニアのスワヒリ語ではバイブイ、ケニアではブイブイという。ブイブイには「蜘蛛」の意もあって、黒装束の女性を見てブイブイを着て

いると表現すれば、タンザニアでは「蜘蛛じゃないよ」と笑われてしまう。

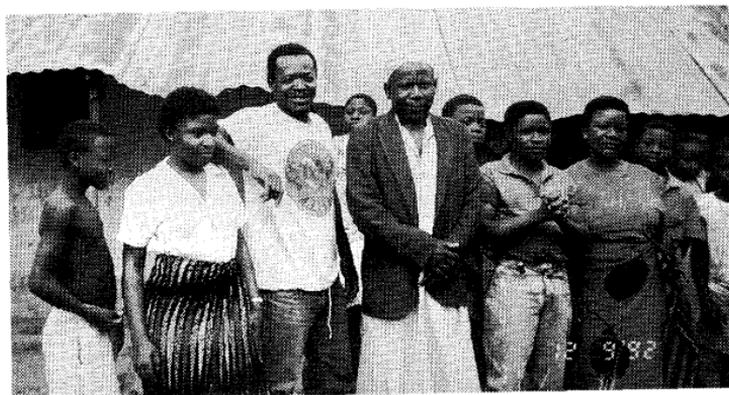
インド・パキスタン系そしてアラブ人系の女性たちは、たとえタンザニア国籍を持っていたとしても、少なくとも服装に関しては外国人女性である。

正装となつた 女性と比べて、男性の服装はどこか画一的である。女性のそれらの多様さと

「カウンダ・スーツ」

彼女たちの情熱にはかなうものではない

い。暑いダルエスサラームで、スーツ・ネクタイの人物はほとんど暑さ知らずか、洋行帰りか、あるいはエアコンの利きすぎたオフィスに勤めているかだ。石油ショックの頃、日本で半袖スーツがかけ声倒れで結局普及しなかったことがあるが、タンザニアではそれに似たカウンダ・スーツという半袖スーツ状の上下服がある。名称は、隣国ザンビアのカウンダ前大統領に由来するのだろうか。カウンダ・スーツは、かつての半袖スーツよりも胸元が閉まっただけで、ワイシャツを着用する必要もなく、当然ノータイである。



コフィアを被り、カンズと上着を着た父親と、ジーンズ姿の息子たち

外国要人と歓談するニエレレ前大統領、ムイニ現大統領の新聞一面の写真はカウンダ・スーツ着用のものであり、タンザニアのれっきとした正装だ。

若いビジネスマンはカウンダ・スーツを着ておらず、半袖のカラーシャツに、ときにはネクタイを締める。老いも若きもイスラム教徒の男性が頭にコフィアという小さな帽子をかぶっている点は、日本のオフィスと異なる。それと、金曜日には正装の白いカンズを着て、その上にスーツを着ているイスラム教徒の男性も見かける。

タンザニアの中では最も近代化されているダルエスサラーム市のみならず、農村に行っても洋装が普及している。大都会との違いは、服に大穴が開いていても気にしておらず、きちょうめんな人でも色違いの布で繕ってあったりすることだろう。

ダルエスサラームに「芸術の家」という名称の民芸品店があるが、そこで売られている生地、あるいは既製のワンピースの柄は、どことなくアフリカ的と思わせる。そして、そのような柄の生地・服を求めるのは、欧米人のような外国人である。こちらがイメージするアフリカ的なデザインでタンザニア人が装うことは、結婚式のような特殊な場合を除いて、むしろ例外的だ。

伝統衣装の

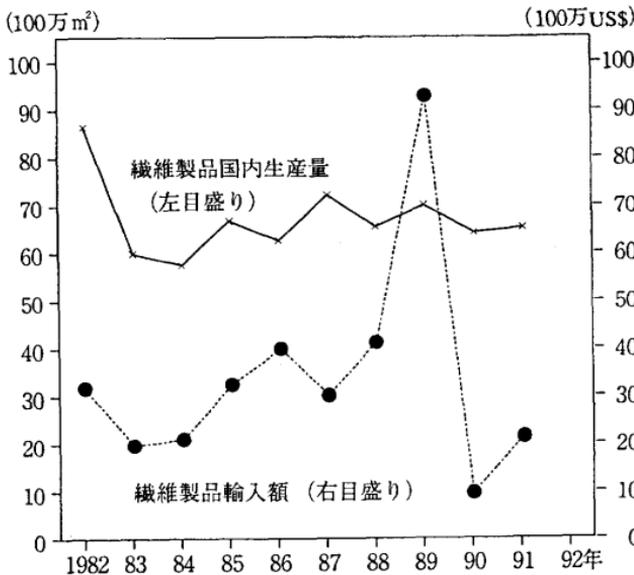
マーサイ人

いわゆる普通の洋装が一般的ななかにあつて、強烈な個性を放っているのが、マーサイ人である。もつとも、どれほどのマーサイ人が伝統衣装にこだわりの、どれほどが洋装化しているのかはわからない。民族衣装に固執するマーサイ人がいるから目立つのであつて、通常の洋服姿であれば、他のタンザニア人と区別が

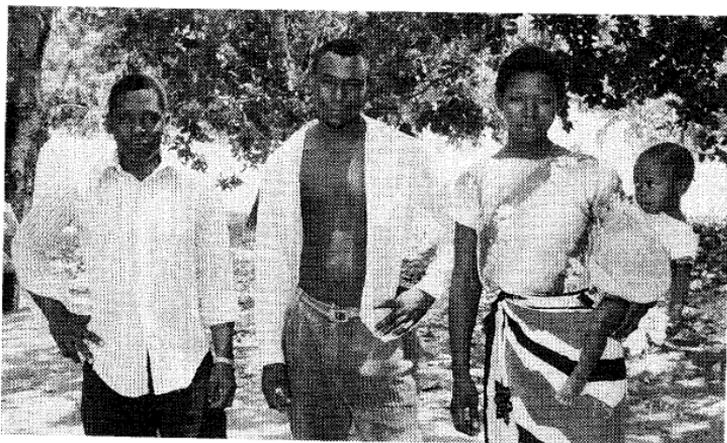
つぎにくい。ここで説明しなくとも、彼らの伝統衣装はどこかでご覧になったことがあると思う。ケニアのマーサイ人のタータンチェックもいいが、タンザニアで見かけたマーサイ人は紫一色の生地を用いていた。紫という色と、文明を拒否した孤高の遊牧民というマーサイ人に対するこちらの勝手な思い入れのためか紫に包まれたマーサイ人になにか高貴なものを感じる。

実際、その勝手な思い入れのせいで、伝統衣装を着て自転車に乗っているマーサイ人を見かけると幻滅する。さらに、伝統衣装を着てサングラスをかけ、トラクターの荷台に乗っているマーサイ人の青年には、啞然とした。なにか場違いなものを見てしまったとの印象である。また、国立公園の周辺で満艦飾の装身具をまとい正装したマーサイの老若男女が、観光客の写真の被写体になって小銭を

繊維製品の国内生産量と輸入額の推移



(出所) *Tanzanian Economic Trends*, Vol. 4, No. 3, table 6(b),14(a).



農村でも洋装が普及している。女性はカンガを巻いている。

稼ぐために一日中たたずんでいる光景は、一種の近代化現象なのだろうか。

輸入自由化で 出回る衣料品

さて、人々が着飾るようになるのは、それだけ衣料品が出回っているからだ。これは一九八六年以来の経済自由化政策、とくに輸入自由化の成果といえる。

図に示したように、繊維製品の国内生産量は、一九八二年の八六〇〇万平方メートルから八三年には六〇〇〇万平方メートルに落ち込んで以来、生産復調の足取りは遅く、九一年でも六三〇〇万平方メートルと、八二年水準に回復していない。この間、公社・民間合わせての繊維産業生産能力は、八二年の二億平方メートルから八五年に二億五二〇〇万平方メートルに拡張されたので、工場の稼働率はむしろ低下している状況であった。

一方、繊維製品輸入額は、一九八五年まで国内生産量に類似した動向を示していたが、八六年以降は異なり、八九年には九三六〇万米ドルに達した。この数字が正しいとす



カンガの着方二通り

れば、同年の輸入総額の七・三%、消費財輸入に限れば実に四五・二%にも相当する。そしてその後二カ年は急激に輸入額が減少している。⁽²⁾

輸入額の急減にもかかわらず、国内生産は増大していないのであるから、価格が上昇しそうなものであるが、衣料・靴の消費者物価指数は、一般消費者物価指数とほぼ同様の上昇率を示しており、特に高騰しているわけではない。

いづれにしろ、いまでも市場に輸入品があふれている。たとえば、「ワイシャツ、ズボン」はカナダ、アメリカ、スウェーデン、台湾などから輸入された古着だが、デザインがよく、値段も安いので人気がある⁽³⁾という。

ろ狭しと並べられている。こちらの値段は決して安くはない。

農村の週一〜二回の市日にも洋服屋がやってきて、広げた布の上に古着を並べている。換金作物を売って小銭が入り、生活必需品を買っても若干金が残った。家の屋根用のトタン板を買うに

は、額が足りない。農業投資にまわすつもりもさらさらない。牛もいないのに、牛耕用の高価な犁を買ってもしようがない。いつ手に入るかわからない農薬や化学肥料の購入費にとっておくのも、馬鹿らしい。ついつい手頃な値段の古着に手が出てしまうことになる。

苦しい時のことを考えてもっと生産的に使えばいいのにも思うのだが、都市でも農村でも、買物リストの中で衣料品の優先順位はかなり高い。

注 (1) Mbelle, A.M., "Restructuring the Public Textile Industry in Tanzania: Nature and Prospects," in M.S.D.

Bagachwa et al. eds., *Market Reforms and Parastatal Restructuring in Tanzania*. ERB (Univ. of Dar es Salaam), 1992. p.187.

(2) *Tanzania Economic Trends*, Vol.4, No. 3, Table 6(b).

(3) 古沢絃造「ダルエスサラームの人々の暮し」『アフリカレポート』第10号、アジア経済研究所、一九九〇年三月。

(いけの じゅん/アジア経済研究所在ダルエスサラーム海外調査員)